

# やすらぎとともに暮らす。 「こもれびの家」にある グループホームケア ひとつの理想郷



『こもれびの家』の玄関を入るとすぐ、高齢者には昔懐かしい田舎を囲んだ団らん風の居に。入居者のみなさんはどの顔も穏やかで、耳のよいヘルツさんの話にじっと耳を傾け、かけりのない笑顔をみせる。

そこには痴呆性高齢者が平穏に暮らすユートピアがある。

宮城県仙台市の南隣、あちらこちらに田畑が残る名取市の小高い丘の上にひっそりとたたずむ「こもれびの家」。

ここでは、痴呆の高齢者がまるで我が家で暮らしているようにやすらいだ表情をみせ、自由にふるまい、そしてにこやかな笑みをこぼす。

痴呆性高齢者の介護を目的として一から設計し建てられた

我が国で初めてのグループホームを訪ね、そこで実現されている介護と建物環境との関係を考えてみた。  
(県が関わった)



平成11年から「こもれびの家」所長を務める蓬田さんは、大和ハウス工業西日本シルバーエイジ研究所の田中所長の取材に応じて介護と環境に関する興味深いお話をいくつも聞かせてくださった。

## グループホームという理想の住まい

名取市は仙台市と空港とのちょうど中間ぐらいに位置し、どちらからでも車で約20分ほどの距離だ。仙台市のベッドタウンで空は青く広く高く、緑色に広がる田畑の風景はのびやかで、知らず知らず和らいだのんびりした気分にしてくれる。訪ねる「こもれびの家」は市の少し外れの、公園や市民グラウンド、陸上競技場やテニスコートなど市民の憩いの場になっている緩やかな丘陵地帯にあったが、道ゆく人に何度訊ねても誰もその名を聞くのが初めてであるように首を横にふった。

そんなものかもしれない。家族に痴呆症の高齢者を抱えて介護が切実な問題でないかぎり、その建物も名前も関心外のことである。しかし介護に少しでも関わる人ならランドマークのように知っているはずだ。そこは痴呆性高齢者の終の住処の一つの理想郷である。建設には小誌「グループホーム読本」で対談していただいた高齢者住環境設計の第一人者である外山義氏が関わり、氏の協力によって建物の随所に痴呆性高齢者に配慮した空間設計が施され、介護環境としての細かな配慮と工夫がなされている。環境誘導という設計思想にもとづき、従来の福祉施設のように機能先行でなく要求に応じて機能を発生させる考えで建てられた痴呆性高齢者のための施設、というより住宅、痴呆性

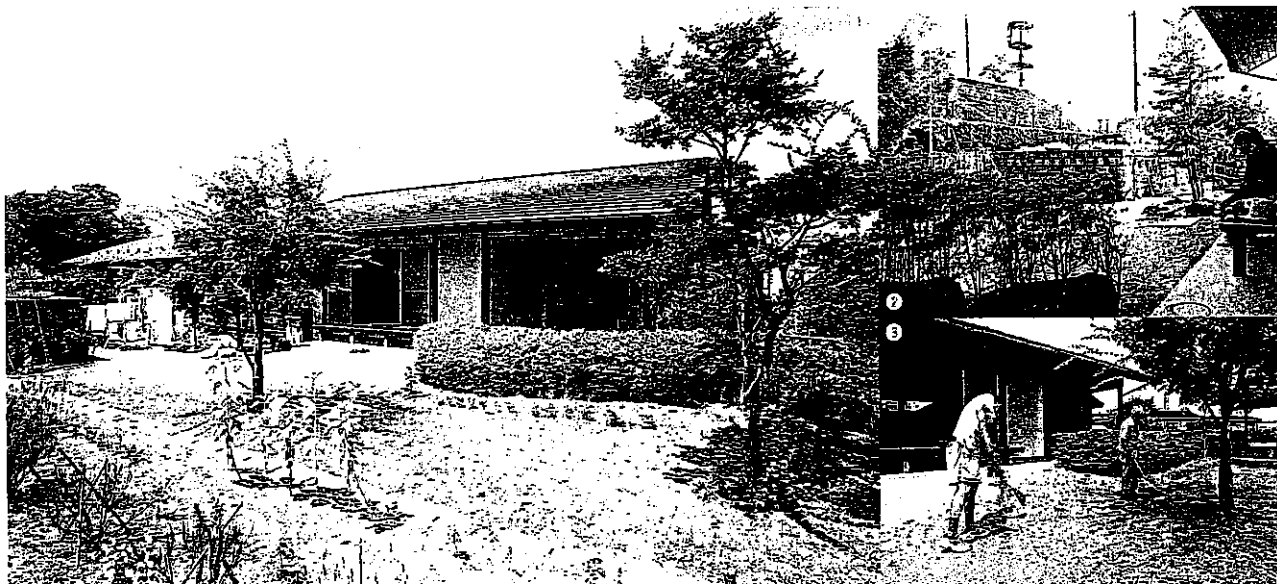
高齢者の憩いのホームである。

あらためて簡単に説明しておく、グループホームとはさまざまな知能障害をもつ痴呆症の高齢者が、5人から9人の少人数で介護者のケアを受けながら共同で暮らす生活の場でグループリビングともいう。そこでは精神的な混乱を招くことなく、“もう一つの我が家”として痴呆症の高齢者たちは疑似家族になって、静かで穏やかな日常生活を送ることができ、痴呆の症状の進行を抑えたり和らげる効果があるとされている。



広い空に雲がたなびき田畑が広がる実にのどかな風景。喧騒と隔絶され鳥のさえずる声だけが聞える心地のよい静かな環境に囲まれて「こもれびの家」はある。ここにしばらく居れば誰だって気持ちが平穏になる。

※環境誘導：痴呆症状の傾向と特徴的な行動を把握し、症状の進行を抑制あるいは穏やかな気持ちへと誘い、精神状態を安定化に導く。



①表通りから見た「こもれびの家」全景。田舎の大きな農家を想わせる雰囲気があり、広い庭には四季のさまざまな花や樹木が植えられている。②通りを挟んだ向こうに重要文化財の農家「中澤家」の藁葺き屋根が見え、入居者の気持ちを安堵させる。農家だった

入居者の1人はこの景色を眺めるうちに症状がおだやかに変化したそうで、居間の場所選定にあたってこの藁葺き屋根の農家が決め手になったらしい。③ヘルパーと一緒に手入れ。庭の掃除や庭いじりを自発的に行なうことも症状の安定化に良い効果をもたらす。

## 普通の家、普通の暮らしの場

垣根越しに表通りから初めて目にした建物は、「こもれびの家」と書かれた玄関脇の大きな表札がなければ通り過ぎてしまうほど何の変哲もない。どこから見ても少し大きめの瀟洒な平屋建ての個人住宅である。通りの向いには畑がありその背後は雑木林で、重要文化財指定の藁葺き屋根の古い農家が道を挟んだ向こうにたたずみ、そして建物の裏側には市の特別養護老人ホームやデイサービスセンターや在宅介護支援センターなどがある。

この「こもれびの家」の設置主体は名取市で、社会福祉法人の宮城福祉会によって運営され、一切をきりもりしているのは蓬田隆子さんと6人の常勤スタッフと1人のパートタイマー、そしてそれを助けるボランティアたちだ。小学校の教師を務め障害者教育にも携わった蓬田さんは、「こもれびの家」の前身である民家を借り切って始めたグループホームに生活指導員として参加し、平成11年から所長を務めている。その蓬田さんが「こんにちわ、ようこそ」と快活な笑みを浮かべて敷地内に招き入れてくれた。

ちょうど入居者が玄関から出てくるとでくわす。「お散歩？」と蓬田さんが声をかける。Sさんはうなずきトトと速足で寡黙に表に出かけた。その後を女性スタッフの1人が見守るようについていく。Sさんは徘徊癖があり始終散歩に出かけるが、蓬田さんは「近くに小さな観音さんがあって、Sさんは家族の健康を願ってああしてお参りに

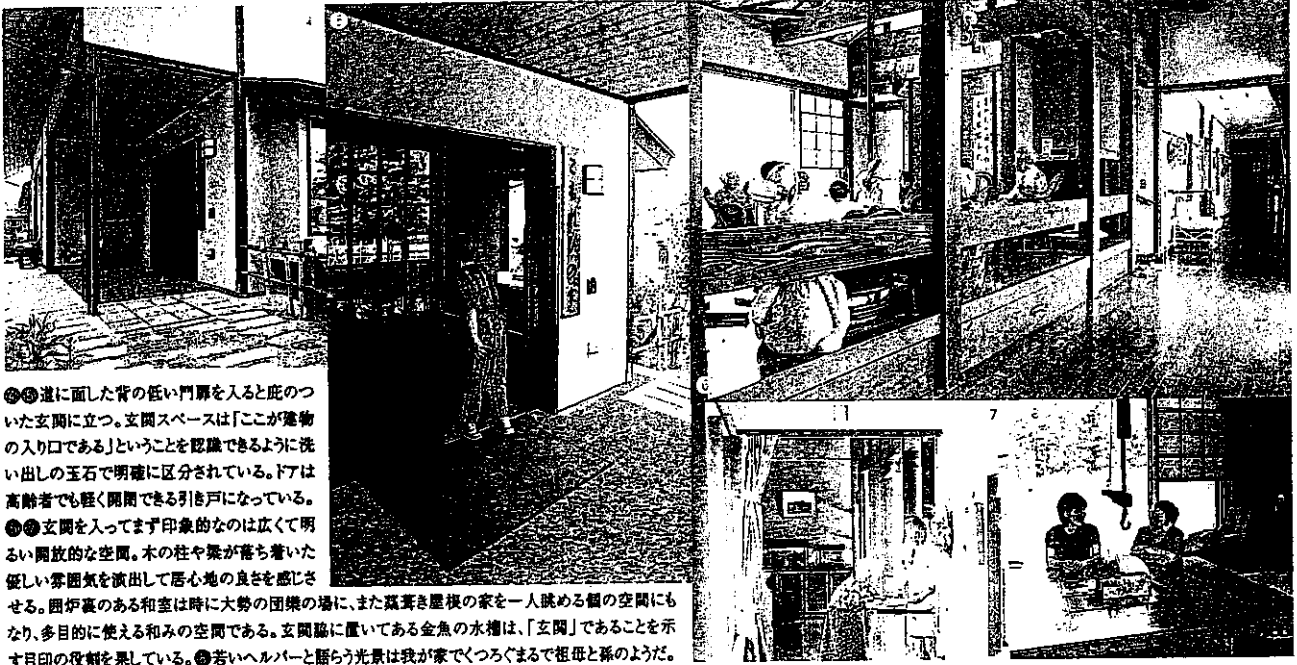
いくんです」と話す。ただしそれが何回も繰り返されるところが痴呆なのだ。すぐ近くだが道が分からずに帰れなくなることもある。だからお参りのたびにスタッフが後ろから付き添う。が、Sさんの行動や振舞いはなんら束縛されていない。すべて自分の自由意思に任されている。「こもれびの家」はSさんの我が家であり、蓬田さんやスタッフは家族なのである。いや、本当の家族ならかえって日毎繰り返される散歩を制限するかもしれない。

蓬田さんは話す。「こもれびの家は、ここに暮らすそれぞれの人の日常生活の場なのです。生い立ちも生活環境も異なる人がそれぞれ自分らしく个性的に、自立して暮らしていく場所なのです。私たちはそれをお手伝いするだけです」。それぞれの暮らしを、日常らしく演出し維持していくことのようにも受け取れるが、考えてみるとそれをするのは実は大変なことで、惜しめない労力と細やかな配慮がなくては決して出来ないことだ。

話している間にも、蓬田さんはいくつかの電話に対応した。見学の申し込みの電話が「毎日のようにあります」という。全国から問い合わせがあり、遠方からの見学も珍しくない。「こもれびの家」は痴呆性高齢者介護に関わる人にはグループホームケアの実践モデルになっている。

## 日本の家の原風景、パブリックと個の巧みなバランス

建物の概要は、むくり屋根の木造平屋建てで延べ床面積



①② 道に面した背の低い門扉を入ると庇のついた玄関に立つ。玄関スペースは「ここが建物の入り口である」ということを認識できるように洗出しの玉石で明確に区分されている。ドアは高齢者でも軽く開閉できる引き戸になっている。  
 ③④ 玄関に入ってまず印象的なのは広く明るい開放的な空間。木の柱や梁が落ち着いた優しい雰囲気を演出して居心地の良さを感じさせる。囲炉裏のある和室は時に大勢の団樂の場に、また藁葺き屋根の家を一人眺める個的空間にもなり、多目的に使える和みの空間である。玄関脇に置いてある金魚の水槽は、「玄関」であることを示す目印の役割を果たしている。⑤若いヘルパーと賑らう光景は我が家であつてくぐるまで祖母と孫のようだ。

は391㎡。日本家屋の特長がふんだんに採り入れられていて、中庭を囲んで回廊が巡り、広さの異なる入居者の個室が10室(定員9人、和室3・洋室7)。パブリックとセミパブリックのスペース、それにプライベートの空間が境界をもちながらしかし、それぞれ巧みに融合させてある。つまり1人の空間と大勢が集う空間、そしてそれらの中間領域としての共有空間がバランスよくレイアウトされているのが設計上の大きな特長である。

もちろん、一つ一つの空間に意味がある。痴呆症の特性を計算して建てられた「こもればの家」の全体の印象は昔懐かしい日本の家屋。蓬田さんはいう。「痴呆症の一つの特長は、今のことは忘れていきますが、昔のことは覚えているんです。現在と過去を往き来して、昔の思い出のなかで生きていたりする。だから、その記憶の中の風景と現実とに違和感があると戸惑って動揺したり、不安や混乱が生じる。自分の居場所ではないと感じて、馴染みのある安心できるものを求めるのです。ですから、こもればの家は入居された人々には昔馴染んだ原風景のような懐かしい家なのです」。

むくり屋根にしているのもそのためであり、通りの向かいに眺められる藁葺き屋根の農家も入居者にとって馴染みのある大切な借景となっている。ふつう痴呆症は環境が変わることに拒否反応を示すものだが、Hさんは移り住んだその日、藁葺き屋根の家が見える場所に座り、落ち着いた穏やかな表情ですっと藁葺き屋根を眺めていたそうだ。聞いてみると居間の場所選定にあたっては、この藁葺き屋根

の家が見えることが決め手になったという。痴呆の症状を安定へと誘う環境をもたらす作用と考えられるが、これは一例で建物のあちこちにこうした手法が見てとれる。それは、記憶が散漫になってしまった人びとや、見当識障害で意味のある行動がとれない、あるいはものを認識することが困難な人でも、五感に働きかけ、身体が覚えている動作や行為を呼び起こす空間づくりといえる。

一つ一つの空間に痴呆症に応えた意味がある

玄関に入る前に一つだけ蓬田さんから言われたことがある。「なるだけ近所の人が遊びに来たようにふつうに振る舞ってください。目立つような動作や大きな声は控えてください。知らない人がやって来るという、日常と異なる環境の変化に敏感ですから。それ以外は自由にしてください」と。だから大勢での見学はなるべくお断りしているという。あくまで日常の時間の流れが大切なのだ。

そうして玄関に立つ。足許は小砂利の洗出しで玄関であることを示すように色別されている。扉は引き戸になっていて、誰でも軽く開けられる。玄関に自分の靴を無造作に置いてあるのは、いつでも自分の好きなときに気軽に表に出られるようにとの配慮からである。玄関脇のベンチは靴の着脱に便利なようにと、そこでおしゃべりしながらくつぐつためのもの。金魚が泳ぐガラスの水槽も単なるインテリアで置いてあるのではない。「わざわざ大きくて赤い金